

この憎たらしくも愛しい世界に祝福を

上坂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

若くして死んでしまった青年、佐藤一麻
女神ポーリカに導かれし彼が出会ったのは

自ら同じ名前の少年と何処かで見たとある自称女神、そして厨二病と変態だった

「俺じゃないカズマがやったんだ」

「お前がサトウカズマだろう!?!」

「そうだけど違うんだー!」

目次

やらかした奴ほど見えないふりをする	1
さよなら人生、こんにちは異世界	10
発見!!アクセルの街	16
さらば!!エリス（お金の方	22
やるぞ!!新生活	

やらかした奴ほど見えないふりをする
さよなら人生、こんには異世界

拝啓 親父殿

これを読んでいるということは、俺はすでにこの世を去っているの
でしょう。

若くして死んでしまい申し訳なく思っておりますが

親父殿が俺にかけていた保険金がおりのことで

納得していただけたらと思います。

短いですがこれにて今生最期の言葉とさせていただきます。

それではお身体にお気をつけて

敬具

佐藤 一麻

「佐藤一麻さん、ようこそ死後の世界へ貴方はい先ほど不幸にも亡
くなられました・・・」

気がつけば辺り一面真っ白な空間

目の前には優しげなまるで女神といっても差し支えないだろう
神々しいオーラを纏った美人がいた

「・・・・・・・・短い人生だったと思いますg・・・・・・・・あの、大丈夫ですか?」

「どうやら、話しかけても反応のない俺を心配してくれているらしい(女神だ・・・)」

「え?」

「しまった、思ったことを口にしていたらしい、このままだと変な人扱いされてしまうかもしれない気を付けよう。」

「あ、気にしないでください」

「そ、そうですか?、コホン、では改めて、佐藤一麻さん、あなたは先ほど不幸にも亡くなられました。私は死後の世界の案内をしている女神ポリーカといいます、現在あなたには三つの選択肢が存在しています。」

「三つ?」

「はい、一つは新たな命として生まれ変わること所謂転生、二つめは天国にて魂の摩耗が進むまで暮らすこと・・・・・・・・」

「(ま、摩耗って・・・・・・・・もうちよつと言い方がないのか?、あと具体的にどんな感じだよ?)」

「あ、具体的に言うのですね、一日中日向ぼっこしていくことになるんですが、正直肉体がないので食事もないですし眠ることもありません、とか何か何も起こせないのです、そのままの生活に耐えられなくなってもう生まれ変わってやる!!って思うとそのまま転生の手続きが始まり生まれ変わる・・・・という感じですよ」

「(あれ?今度は考えていたが確実に声には出していないはずなのに) (あ、私が人の考えていることが分かる魔法が使えること言ってますんでした)」

「あー、そんな魔法?があるんですか、便利な世界ですね死後の世界って」

「・・・・・・・・え、ちよつと待ってくださいなんで、あなたが魔法のことを知っていますか?!」

「え、いや、こころ脳内に言葉が入ってくるので、そういうものだ・・・・」
「(え?!この魔法一方通行じゃないんですか?ま、まずいです、このまま

だと異世界転生の話を聞いてもらおう前に通常転生を選ばれてしまいかねないです、ここは素早く説明してから・・・あ)

どうやら、今の脳内会話はこの女神さまの魔法が原因だったらしいこの状態は不味いとおもったのか女神ポーリカが指鳴らすと少し回りが暗くなった

と、同時に脳内会話も聞こえなくなった、どうやら魔法を解除したらしい

微妙な間が生まれた、俺はこの状態に戸惑い、女神ポーリカは思考が漏れていたことに動揺してか。

時間にして数分だろうか、もしかしたらそんなには経っていないのかもしれないがこのままでは状況が改善しないので、意を決して話かける

「あの、女神さま?」

「あ、はい、な、なんででしょうか?」

若干ビクビクしている。何この可愛い生き物

「話が進まないのとおりあえず、三つ目の選択肢について教えてもらえますか?」

「・・・はい、えー三つ目の選択肢ですが、この世界ではないどこか、貴方にとつては異世界と言えればいいでしょうか、所謂ファンタジー、おとぎ話に出てくるような世界なのですがその世界は現在魔王と呼ばれるものにより、世界の危機に陥っています」

「まさか?」

「はい、なので彼方の世界からでは生まれても直ぐに死んでしまいやすいので、生まれ変わりを拒否する方が多く人口がどんどん減っている、逆に此方からその世界に転生してもらおうことでバランスをとっています」

どう聞いても選択肢があるようでない

「この世界で生まれ変わります」

.....この状況はなんだろう？

「お願いします、お願いします！異世界転生を、異世界転生を選んでください!!」

女神ポーリカは今ではもう涙目で異世界転生を進めてくる
なんだろう、たまにテレビで見る、昔のサラリーマンが脳裏に出てくる

「いや、だつてさっきの説明を聞いてたらそんな危険な選択肢選ぶわけないだろ?!」

「お願いします、今年ももう終わりなのに私の成績はまだ一件もないんです!」

なんだろう、女神のような美人.....、実際女神なのだろうけれど。この涙目で必死な顔を見ていると

最初に感じていた神々しい雰囲気は何だったのだろうかと思ってしまう。

「成績つてなんだよ、神様にもそんなものがあるのかよ?!」

初めは丁寧の話しかけていた(つもり)だが、この状態のポーリカと話しているともう、敬うとか丁寧に話かけるとかも無理だ。

「大体、アンタさっきの説明でよく俺が異世界転生を選ぶと思えるんだよ、デメリットしかない選択肢の案内しかないじゃないか」

「え?」

「なんだよ2番目の天国行きなんて、天国という名の地獄みたいなところにしかな聞こえないし、異世界転生したつて、そんな危ない世界行つたつてすぐに死んで終わりじゃねえか!」

「そ、そうですね.....」

「そうですねじゃねええええ!!、そんな選択肢なら、一番安全なこの世界での転生を選ぶわ!!」

「待ってください.....そ、そう、特典。異世界転生なら、すごいとてもすごい特典がもらえるんです!!」

「特典?どうせ、ロクでもないものなんだろう?」

「そんなことはありません。こゝ、これを見てください」

どこからか、分厚い辞典のようなものを見せてくる

「この中には、異世界転生を選んでもらえる方に渡しているすごい力や、武器、才能が書かれています」

ほうほう

「きつとこれを見れば貴方の担当する子も今度こそは異世界転生を選んでくれる・・・はず・・・よ・・・」

「メモを読むなよ、てか誰の入れ知恵だよダメダメじゃないか、お前女神じゃなくて実は駄女神だったのか？」

「だ、駄女神じゃないです、駄女神って言わないでください！」

駄女神という言葉に何かトラウマでもあるのだろうか、涙目の瞳はさらに潤んでいく駄女神ポーリカ

というか、とうとう泣き出した。

しまった言い過ぎたかもしれない

「悪かったよ、言い過ぎた。因みに例えばとして、どんなものが貰えるんだ？」

「うう・・・そうですね、なんでも切れる魔剣グラム・・・はすでに貸出してますね、あとは・・・魔法の天才といわれる魔法を覚えるための補正を受けられる才能・・・も貸出します：ね。じゃ、じゃああとはですね・・・」

それから、しばらくカタログを捲るも良いものはすでに他の転生者が持ち出しているようで、碌なものがない。

「なんでも貰ける槍」

「矛盾という概念により、持ち出し禁止となりました」

「持ち主を守り続ける鎧」

「あ、まだ返却されていないようですね、ちなみに歌って踊れるそうですよ」

鎧が踊る？意味がわからない

「・・・なにかすごいものを召喚使役できるもの」

「現在封印されています」

「逆に聞こう、何があるんだ?」

「そうですね、あ、これなんかいいですね。ジャンケンに負けない才能」

「それでどうしろと?」

「あー、うんやっぱりこの世界で生まれ変わるわ」

「あー。。。待ってください。最後です本当に最後にですから、もうちょっとだけ待ってください!」

パラパラとカタログをめくるポーリカ、その時、栞のようなものが見える

「おい駄女神」

「駄女神じゃないです、じゃないんです・・・」

「その栞のページにはなにかがあるんだ?」

栞を指さして伝える。いままで忘れていたのか天恵を得たとばかりに笑顔になるポーリカ

「あ、そうですそうです、アクア姉さまが言っていました。本当に困ったらこの栞のページを見てみなさい、きつと全て上手くいくわよ!つて。ああ、ありがとうございます姉さま!というわけで、さあ佐藤さん見てください!」

ぐいぐい押し付けてくる、ち、近い近すぎて見えない

てかアクアってだれだよ。姉さまというからには姉なのだろうが、コイツの姉というのがすごく不安だ

「えーなになに?、悪運(E X)結果的にいいほうに物事が起こる・・・次、超防御 攻撃が効かなくなる(敵味方に)・・・次・・・夢幻の剣世(空想の実体化) ※ただし扱いは別途ステータス必須・・・無理だな、次、技能模倣(スキル模倣)・・・e t c, e t c:女神・・・」

・・・
???ん???

「なあ、女神って書かれているんだけど、これなんだ？」

「えーとですね、詳細説明には天界から特典授与者の認識内の神との臨時契約って書いてますね」

「つまり、俺の場合だとお前か？」

「そうなりますね、あとは佐藤さんが信仰している神ですね・・・だ、ダメですよ、いくら佐藤さんが若い男性だから仕方がないとはいえ女神をモノ扱いするなんて、ダメですからね」

「ちらちらと視線をさまよわせながらモジモジしている。

「いない」

「ナンデですか?!、私そんなにダメですか？」

「選ばれたのか、嫌なのかハッキリしてほしい、まあ選ばないな

「んじや、次のこの技能模倣ってやつはどんなものだ？」

「ダメなんですネ、私じゃダメなんですネ・・・ダメダメ駄女神・・・駄女神ポリーカ・・・るるるー」

「いいから説明してくれ、話が進まないだろ」

「佐藤さんは結構いじめっ子気質ですね」

「そんなこと言われたのは初めてですがナニカ？」

「えー、技能模倣。名前の通りとしか説明できないのですが・・・」
「根本的にスキルとはなんだ？、こっちの世界でいう技能とは違うのか？」

「そうですね、違います、例えば佐藤さんは料理しますか？」

「まあ、人並みぐらいには」

「例えばとして、佐藤さんが料理人というスキルを覚えたとします。その場合初めて作る料理でもそれなりの仕上がりになり、味もスキルを持っていない人が作るよりも美味しくなります。ちなみに、魔法などはスキルを習得したのちに詠唱といわれる魔法の安定を図るため、また発動しやすくするための呪文を暗記すれば使えるようになる。・・・といった感じですね」

「スキルを覚えるための制限はあるのか？」

「ええ、基本的には職業に対応したスキルしか覚えることができなないので、冒険者といわれる最弱職についてはなぜかほかの職業のス

キルを覚えることができます。ただこの場合本職の半分も性能が引き出せません」

「ほう、で肝心のこの特典だとうなる？」

「他の職業でも【冒険者のよう】にスキルを覚えられるようです」

ふむ、なかなか悪くない特典のようだ・・・というか他にあるものが地雷にしか見えない

「じゃあ、仮にこの技能模倣ってやつを持っていく特典として、異世界だと言葉とか常識とか違うだろ？その辺りどうなんだ？」

「その辺りは大丈夫、私の女神パワーでなんとかしますから、言葉も文字も問題ありません!!」

胸を張って右手で胸元を叩く・・・ペタン。。。見なかったことにしておこう

「最後に、生活資金はどうすればいい？」

「それは、転生後に日雇いの仕事がありますので、それをすればいいですよ」

「やっぱり異世界にはいいかn」

「分かりました、分かりました！私のお小遣いを渡しますのでしばらくはそれで生活してください!!でもそんなにお小遣いがないからその後は自分でなんとかしてくださいね」

なんだろう、お小遣いって、いろいろと心苦しいが貰えるものは貰っておこう

「じゃ、じゃあ、これを渡しますので、この書類に指をなぞって決定してください。それで異世界転生の転送を行います。」

財布？がま口財布かを渡され、一緒に書類を渡される。

焦っている様子から俺が異世界行きを断る前に押しきるつもりのようにだ。

一応確認してみるが書類は日本語で書かれているので理解できた。問題は無いようだ

「なぞればいいのか？」

「はい、なぞると、そこが複製されるので。(確認しました)ということころをなぞってください。じゃ、じゃあ転送しますから動かないでく

「ださいね」

足元にファンタジーな魔法陣が現れて身体が宙に浮く、浮いたところで書類が粒子状になり身体に入ってくる

「今の粒子が特典になります、今回は物ではなく才能の類なのでこうなります。では、佐藤さん異世界でも体にお気をつけてくださいね。願わくば貴方が魔王を倒し勇者とならんことを!!それではいつてらっしゃい!!」

そうして俺は異世界に旅立ったのだった。そして異世界に降り立って30分でこう呟いたのだ

「……なんでやねん……」

発見!!アクセルの街

「……なんでやねん」

別に西に住んで居たわけでもないのに思わず出てしまったツツコ

あの駄女神はそんな奴だったな
そう思わずには居られなかった

光に包まれたあと、気がつけば草原にいた

ファンタジーとはなんなのかとも思ったうがよく考えたら現代日本にはこんな草原なんかあるわけないと気づく

「転送って、言ってたか？何で町じゃないんだ」

これはマズイ、非常にマズイ何がとか言わないが
「おいおい、どっちに行けばいいんだよ？」

ヤバイさすがに着の身着のままこんな所に放り出されたら速攻で死ぬ死んでしまう！

いや、落ち着け佐藤一麻まだ最悪の状態だと決まった訳ではない。
「と、とりあえず現状確認を」

持ち物。

服、靴、財布（ポーリカの）以上!!

うん、これはヒドイ

軽く挫けそうになりながらも、このまま此処にいてもどうしようもないためとりあえず移動することに

とはいえ、目印になりそうなものもないので適当に歩きます。
しばらく歩けばこの状況もなにか変わるだろう

「や、やっと見つけた」

先程の草原から歩くこと数時間ようやく視界に変化が訪れた。

道と言っているのかわからないが、漸くそれらしいものを見つけたので今度はこれを辿って行けば何処かに着くだろう、そう思った時

「ソコニダレカイルノ？」

何処からか声がした。

道の端に突き出ている出っ張った岩、そこに腰かけた緑髪の少女が、周りをキョロキョロと見渡していた。

こんな所に一人で？

おかしいと思いつつも話しかけてみないとどうにもならないと思いつつも警戒しながら近づく。

「こんにちは、俺が言うのもなんですがこんなところで何をしていますか」

近づいて気がついたのだが少女は右足の足首に怪我をしているようで、血の滲んだ包帯を巻き、それをチラチラと見ている顔をしめかめてる。

俺が声をかけて気づいたのか少女は上目遣いでこちらを見た。

なんだろう、俺は決してロリコンではないはず

いや、嫌いではないのだが決して変態ではないはずなのだが、なんだろうこの守ってあげなければという感情は

「ダレ？アナタハダアレ？」

「俺は佐藤一麻、旅をしているのだが道に迷ってしまつて困つてるところなんだ」

怖がらせないようにできるだけ優しく答えた

「ソウ」

だが、どうやら怖がらせてしまったようで簡単な答えが返ってきた「足を怪我しているのか？簡単な処置ならできるかもしれないから見せてくれないか？」

「ダイジョウブ？」

「なんで疑問系なのか分からないが、まあ大丈夫だろう。診た感じ血も止まっているみたいだし」

拒否されてはいないようなので、手当てしようと近づいた時気がついた。怪我しているように見えたのはそんな感じに見える、まるで木のような肌だった。

「怪我じゃないのか」

「ダイジョウブ？ダカラワタシカラハナレテ」

まあ、ケガしていないなら構わないがどういいうことだろう

「確かものすごい珍しい病気に樹枝病とかいう、体が木のようになる病気があったが・・・」

しかし、こんなにも全身が変化していると、普通は生きていられないはずだけど

「ワタシビョウキ？」

結構元氣そうだ、とはいえずぐにどうこうとはならないだろうが放置していいわけない

「病気かどうか分からないから街にいつて医者に診てもらおう」

「ワカラナイ、マチ？ドウスル？」

どうも、さつきからの反応が不自然な気がする、幼い言動が見えるが以外に頭がよさそうな・・・

違和感があるが気にしていても仕方がない、この子は保護して街の人間に相談してみるしかない、か

「えーっと、俺は街に行きたいんだがどっちに向かえば良いか知ってるかな？できれば君を保護していつて病気かどうかちゃんと見てもらうべきだと思うんだが」

「ンー？」

ん、伝わってないのか？

「街に俺と一緒にいこう」

「ンー？マチ？ドコニ？」

言い回しが難しかったのかと思い、簡潔に言ってみるも伝わらない「きみと・・・って名前聞いてなかったな、きみの名前はなにかな？」

「シラナイヘンナヒトニナマエライツタラダメツテイワレテル」

「アッチ」

ミドリは一つの方角を指し示す。お、やっと、やっと指針ができた。これで街に迎える

問題は距離なんだが……

「ちなみにどれぐらいでたどり着けるかな？」

「ワカラナイ」

why、どういうこと？

「なんで分からないのかな？」

「ワタシズットココニイルカラ」

もしかしたら、ミドリは捨て子なのだろうか。だからと言ってそのまま置いていくわけにはいかない

「よしあっちだな、じゃあ行こうか」

そう言いながら手を差し出す、ミドリはおずおずと手を伸ばしてくる

徐々に近づく手と手、そして遂にミドリは俺の手を掴んでくれた。

「よし、じゃあ行こうか」

「ん……んん？」

なにか、不思議そうな顔をしているが、嫌がっているわけではなさそう。しきりに手のひら、甲、腕をペタペタして首を捻っている、もしかすると男に触るのが初めてなのかもしれない、少しくすぐったいが問題なければいい。

そして俺たちは出発した、いつ到着するか分からない街を目指して。

結果として、初心者街と呼ばれるアクセルの街にたどり着くのに

1週間かかった

理由その1： ミドリの歩く速度が異常に遅い

最初は微笑ましく見ていたのだが、流石にどうにもならないと思い背負う、もしくは担いでいこうとしたのだが、ミドリの身体が想像以上に重くまた木化しているせいなのか本来の身長以上に足の部分が長くなっており、背負ったとしても体の一部が地面を擦ってしまうことになるため、長時間背負つての移動が難しかった。結果的に背負つて進んでは休みがてらゆっくりと歩いて、また背負つてと延々繰り返しでの移動となってしまうた。

理由その2： 日当たりのいい場所に来ると「しばらくお待ちください」とばかりに移動を拒否される

なんだろう、やっぱり身体が木化しているからか光合成でもしているのだろうか？

ミドリに聞いても教えてくれない、ただ「アナタジャダメダカラ」と呟いていたのはなんなのだろう？

それでも、一人で歩き続けるよりは精神的にはずっと楽だっただろうと思う

ただ、この世界にきて殆ど飲まず食わずだったのに、倒れることもなく移動できたのは奇跡だと思う

我ながらよく生きていると考えてしまう。

不思議なことにミドリと手をつないで移動しているときは不思議と力が湧いてきて、夜明け前の寒さも気にならなかったような気がする

これが俗にいう父性というものなのだろうか？世の中のお父さんたちは凄いなだなど思いつつ

街に近づいて行く。

さらば!! エリス（お金の方

この世界に転送され早一週間

歩き続けてやっとたどり着いた街

ここには一体どんな人間が住んでいるのだろうか

そう思いつつ街の入り口を探して入ろうとすると

「おいあんた、そんな軽装で一体何処から来たんだ？」

門番らしきおじさんに呼び止められた

「あー、田舎から冒険者になりに出てきたんですが、途中でこの子を見つけてまして、病気なのか、怪我なのか分かりませんが身体があまり動かせないようなので背負いながら来たんですが、荷物は途中で無くしてしまい今は身一つですよ。あははははは」

秘技【笑って誤魔化す】

「そうかい、この季節によく無事にたどり着けたな。」

「そうですね、もしかしたら人助けをしたから神様が助けてくれたのかもしれないです」

そう言うとおじさんは、そうだろうそうだろうと頷き

「なんて言っちゃって、エリス様は幸運を司っている御方だからな」

と勝手に納得してくれた。

どうやらこの地域では、エリスという神様がメジャーなようだ、信仰な関しては気を付けない話さないと最悪血で血を洗うことになるかもしれない

「後でエリスさまにお礼をしたいのでこの街の協会を教えて貰えますか？」

それらしく言っておけば問題無いだろう

「ああ、街の中心に向かって行けばギルドがあるからそこから見える一番高い鐘のついた建物だよ。困ったことがあつたら助けを求めなさい、きつとエリス教徒のみんなが何か助けてくれるから。」

同じ神を信仰していると思われたのか、先程よりも優しく教えてもらえた。

ゴメンおじさん、俺無宗教なんだ

とはとても言えず、再び笑って誤魔化し街の中へ入れてもらった。

おじさんの案内を思い出しながら歩いていく

話によれば、そろそろ見えてきてもおかしくない……お、あれか

うん、紛れもなくファンタジーっぽさのある大きな建物

いや、これまで通ってきた道の周りにある建物も十分ファンタジーっぽい（中世的な意味で）のだが

このギルドらしき建物はまさしくゲームに出てくるような建物で大型の動物の骨なんか飾りで使われている。

これは、中二病はとつくに卒業したつもりである俺だが心踊るものだ

「これは……すごいな」

「ン？タベモノ？エイヨウ？」

「あ、ああそうだな、いろいろと手続きしたら何か食べよう」

「……ン」

建物を見上げながらミドリと会話していると目の前の建物から嚴ついで男が出てくる

冒険者なのだろうか、上半身がほぼ裸でスポンをサスペンダーで支えている。

なんだ、あれは？ここはファンタジーであって世紀末ではないはずだぞ

って、近づいてきたぞ、なんだ？カツアゲでもされるのか?!

そう、警戒し身構えていると男が話かけてきた

「坊主、こんなところになんのようだ？宿ならここからもつと東側だぜ？」

お？言葉遣いは荒いが以外にも紳士的だ

「えと、冒険者になりに来たんですが、ここであってます、か？」

「お、なんだこの野郎、命知らずな奴だな。だが冒険者はなるのも辞めるのも自由だ誰も止めたりはしないさ、歓迎するぜルーキー!!」

「よろしくお願いします」

「いい返事だ、そっちの嬢ちゃんは……訳ありか、深くは聞かんよ。さて、冒険者登録はギルドの受付でやってる、案内してやるからついてきな」

まさかの優しい対応に驚くもお言葉に甘えてついていく

ギルド内は酒場も兼ねているのか賑やかだ

しかし、想像していたよりもずっと穏やかだ、もつと荒くれ者達がいると思っていたのだが。

あ、誰かがウエイトレスに殴れた、セクハラでもしたのだろうか？

「坊主あそこが手続きをしている受付だ、もし何か困ったことがあればまずはあそこに行くといい、ちなみに、食事がしたいなら適当に座ってスタツフを呼べばいい」

そう言いながらカウンターに近づき受付の女性に何かを話しかけている

「後は彼女に詳しく説明してもらいな、じゃあな」

素晴らしい男はギルドから出て行った

しまった、お礼を言いそびれてしまった。冒険者なのだろうからまた会ったら絶対お礼をしよう

「あのお、そろそろよろしいでしょうか？」

そう思っていると、受付の女性が話しかけてきた

「あ、お願いします」

「はい、では冒険者登録を行うということでしょうか？」

「はい」

「ではこちらの機械に手をかざしてください、そうすると貴方のステータスと適正職業が分かりますので」

言われるままに青い球体のついた機械に手をかざす

おおう光ってる光ってるすごいな異世界

時間にして数十秒ほどだろうか、だんだんと光が弱まると機械の下から一枚のカードを取り出した

「はい、もう結構ですよ、これが貴方だけの冒険者カードと呼ばれるものになります。これにはステータススキルなどの状態が分かるようになるもので、レベルアップを経る毎に各能力が上昇しますのでご自分のステータスは把握するようにしてくださいね。．．．あれ？」

説明をしながら、内容を確認してくれているが何かおかしいところでもあったのだろうか？

「どうですか？俺のステータス」

「え、ええと、どう説明したものが困るのですが、ありのまま説明しますので落ち着いて聞いてください。まず各能力値ですが普通より全体的に少し高いですね、ただ運がかなり悪いですね」

運が悪い。ああ身に覚えがありません

若くして死んでるし、親はアレだし、神様はもつとアレだし．．．

「このステータスなら運の必要な盗賊、賭博師、などのサポート職以外なら大体なれますよ」

「できれば、一番稼ぎやすい職業がいいんですが．．．その、旅の途中で荷物を落としてしまつて余り余裕が．．．」

「そうですね、回復職になれば討伐クエストから帰ってきた冒険者の治療をして稼ぐこともできると思いますが」

「じゃあその回復職をお願いします」

「はい、わかりました。プリストですね、ではこの用紙に記入してください」

えー、なにに名前、年齢出身地？なんだか、役所みたいだな

書ける範囲だけ書いていく、おー異世界の文字もかけるものだな

「はい、ありがとうございます、ではこの紙と冒険者カードを合わせて、．．．、あら？職業欄が冒険者しか出てきませんね、これはいったい．．．」

また嫌な予感がしてきましたよ

「申し訳ありません、原因は分かりませんが冒険者しか選べないようです。能力的には問題無いので、もしかしたら職業適性が合わないのかもしれない。なのでレベルを上げてから再度転職を試してください」

「ちなみに、冒険者はなにができるんでしょうか？」

「全ての職業のスキルを覚えることができるのである意味ではなんでもできます、ただステータスの伸びもよくないですし、各スキルを覚えるのにもより多くのスキルポイントが必要ですし職業の補正がないのでどうしても器用貧乏になりがちです。ですので基本的に転職が可能なら大体の方がすぐに転職してしまいますね。」

あれ、これはまさかの能力ダブったのか？

そうだよなあ、駄女神のオススメだったものなあ

「選べないなら仕方ありません、冒険者でお願いします」

「はい、冒険者サトウカズマさん、え？あのここに書かれた名前は間違いではありませんよね？」

「はい、間違い無いです」

なんだろう？珍しい名前だったのだろうか

「そうですか、頑張ってくださいね」

何か含みを感じた気もするがまあ、イレギュラーが起こったようだし仕方がないと思うことにする

「はい、頑張ります。で早速ですが何か仕事は有りますか？」

「有りません、というか、この時期は比較的簡単なくえすとは早い者勝ちになってしまい残っているものは高難易度なものばかりで成り立
ての冒険者にはとてもさせられません」

「じゃあ、他の冒険者はこの時期は何を？」

「そうですね、基本的におとなしく春になるのを待つ方が多いですね」

あれ、これは詰んだか？

持ち物ほぼ無し、要救助者一名、仕事無し、家無し

「ちよ、ちよつと待つてください」

街に着くまで確認しても仕方がないと見ないようにしていた駄女神の財布を取りだし中身をカウンターにぶちまける。中から出てきたのは数十枚のコインと何かの紙、そしてよく分からない石ころだった

「あの、この辺りの物価とか分からないのですがこれでどれくらい暮らせますか？」

仮にも女神の財布だったのだ、仕事ができるまで食い繋げればなんとかなるはず！

希望を込めながら出てきたコインを見つめる

受付の女性はコインの種類ごとに分け、数え終わると気まずそうに話始めた

「だいたい5000エリスですので食事を押さえて馬小屋で3日泊まれば、といったぐらいでしょうか」

と、希望など無いのだとそう宣告したのだった

やるぞ!!新生活

「おーい、シユワシユワはこっちだ」

「あ、こったにもおかわりちようだい」

「はーい、今行きます」

「んあはひも、ンハンハ、おああり」

「飲み込め！飲み込んでから喋れ!!」

「ングング、私もシユワシユワおかわり!!」

「私はリザードランナーの尻尾の山賊焼きを」

「んじゃ、俺はジャイアントトードのから揚げとクリムゾンピアとあと適当にツマミの盛り合わせ」

「はいはい、分かりましたよ」

結果として、俺は暫くの宿を確保できた

着の身着のままやって来た新人冒険者の救済として

ギルドで働かせてもらえるようになった

給料は少ないが食事はまかないが貰え、住む場所はギルドの宿舎を一室貸してもらえた

あとは、冬の終わりを待ちその後冒険者家業の始まりとなる

そして、残る問題は……

えー、まずミドリさん

診察を受けようにも金がない

いやあ、日本に居たから分らなかったけど保険制度って凄かったのだとしみじみ思った

流石異世界、いや異世界は関係無いのだろうけれど

聞くと、医者というか、呪術師が医者のようなことをしているようだ

そして、専門魔術と知識が必須な職業なため

簡単なものでも数万エリスはかかるとのこと

今の俺では逆立ちしてもどうしようもない額だ

現状、特に緊急性はなさそうなので動き辛いだろうが

我慢してもらおうしかない

そして、不思議なことにベッドで寝てくれない、というか、部屋の中に余り入ってくれない

部屋の入り口の土間に座り込んで窓の方をブーツと眺めてあまり動かなくなってしまった

仕方がないのでそのままにしているのだが大丈夫なのだろうか？

不思議と言えば、ミドリと触れあっている間あまり空腹を感じなかったのだが街に来てからは普通に感じている、やはり、あれは火事場の馬鹿力的な現象だったのだろう

まあ、そのミドリは余り食事を摂らないので、それはそれで栄養的に大丈夫なのかと心配だ

心配なことだらけなきはするが、これから俺の新生活が始まるのだ、頑張っていかなければ

そう、思ったのだ

あれから一週間仕事をしながら情報を集めた

春になれば受けられるようになる、初心者向けクエストにはどういったものがあるのか

周辺の弱い魔物、強い魔物。成り立ての冒険者によくある死因とその原因

流石は始まりの街、このての情報はよく集まる

ほとんどがギルドから見せてもらった資料からだけど・・・

そして、最弱職の俺を入れてもらえるパーティーも平行して探した。

なんでも、流石に装備も録にないのに一人でクエストは無謀だと受付のお姉さんに言われた

その結果、荷物持ちでなら構わないと言ってくれるパーティーがい

くつかあったのでその際はお世話になるつもりだ

いやあ、ギルドにたどり着いてから助けられてばかりだ

このお礼はいつか必ずしよう

「そういえばサトウさん、パーティーと言えば、探していますけど」募

集の掲示板はご覧になりましたか？」

「え？、あそこに張ってあるのクエストだけじゃないんですか？」

「ああ、やっぱり気づいてなかったんですね」

若干呆れられながらも説明してくれるお姉さん

「あそこにあるのは主にクエストです、そしてその隣に少し小さい掲示板がありますよね？」

ギルドの入り口から少し離れたところにある掲示板の方を指差しながら続ける

「あの掲示板はギルドからの情報や国からの告知、その他冒険者の情報交換スペースです、もちろんパーティーの募集に関することや共同での高難易度クエスト挑戦の相手探しなど多岐に渡りますですが、現状クエストがほとんど無いため、クエスト用掲示板に纏めてから掲示してます。元々はスペースが足りないために追加で作って使用していたものなので、知らなくても仕方ないですけど」

「じゃ、じゃあもしかして新米冒険者を募集しているパーティーが」

「まあ、無いわけでは有りませんがわざわざ書いてありませんね」

「ほんとうですか？どの辺りにあるやつですか？」

「右下の端にあるものと、真ん中にあるものですね」

「ありがとうございます、じゃあ後で見に行きます」

そして、仕事が終わる

件の掲示板へ、そこでクエスト案内のなかに紛れることもなく

まさにと真ん中に張られているパーティー募集の張り紙

そして、掲示板の端の方にまるで隠れてます見つけてください、とばかりにちよこんと張られている張り紙

……なんだろう？作成した人間の性格を見た気がする

えー、なにになに？

「パーティーメンバーを募集しています、条件は優しく人の名前を笑わない方、一緒に食事をしたりお話してくれて、クエストのない日でも一緒に居てくれる人。当方後衛職のアークウィザードで最近13歳になりました。よろしくお願いします。」

なにこれ……

まるで迷惑メールに書かれているような怪しげな文面

いや、書いた本人はそんなつもりは無いのだろう

現代日本で汚れた心がそう思わせるのだろう

で、もう一枚は

「来たれ若者！

求む、パーティーメンバー！！

応募条件は上級職限定、前衛職ならなおよし、アクシズ教徒なら最高よ、(です)

報酬分配はクエスト毎の貢献度をリーダーである私が決めます。

共に魔王を倒すため戦いましょう！

なお、こちらは才色兼備で女神なアークプリーストと冒険者の二人です

※追記 一般的な常識のある方なら上級職でもなくても可

さっきのも凄かったが、これはまたとんでもない

まず、始まりの街で上級職限定とか意味が分からない

そんな数の上級職なんて居ないんじゃないか？

前衛希望なのは分かるが、アクシズ教ってなんだ？

エリス教と異なる宗教なのは分かるがそれ以外聞いたこともない

怪しげな宗教では、ないにしてもマイナーもしくは

いや止めておこう、
……

で、この報酬分配方法だと最悪まともに分配されないかもしれないが、こればかりは話して見ないと分からないし、魔王討伐とか無理だろ、しかし自分で女神とか書かないだろ普通 ……

女神ねえ、まあこんな世界だから女神もいるのだろうが普通こんな所に来ないだろ、もつとそれっぽい所に

例えば協会とか神殿とか

「あ、サトウさん。どうです募集の張り紙はまだ出てましたか？」

「あ、お疲れ様です。ええ、ありますね（何か凄いのが）」

そう張り紙を指差しながら、答えた

「そうですか、良かったですね」

「あとは、話してみても考えます。それです。この募集主に会いたいです。どうすれば良いですかね？」

「そうですね、この方々なら明日にはお一人は確実にいらつしやいますね、もしかしたらもう一方の方も夕方ぐらいに来られるかもしれませんね」

常連というのもおかしいが、もしかすると、顔見知りなのかもしれない

「そうですか、じゃあ明日にでも話しかけて見るので来てたら教えてくださいませんか？」

「分かりました」

そして、次の日

「サトウさん、奥の席に座っている黒髪の女の子がそうですよ。今はそんなに忙しくないから休憩ついでに話してみてもいいですか？」

「わかりました。じゃあ少しの間抜けますね」

受付のお姉さん・・・（ルナさんというらしい）にお礼を言いながら

奥の席にいる女の子に近づいていく、驚いた本当にこんなに若い女の子が冒険者をやっているのか

しかもアークウイザード、魔法使いの上級職ときた。
一体どんな子なんだろう、そう思いながら意を決して話かけるの
だった